

公表

事業所における自己評価総括表

○事業所名	デイサービスACT（放課後等デイサービス）		
○保護者評価実施期間	2026年1月6日		2026年1月31日
○保護者評価有効回答数	(対象者数)	33	(回答者数) 24
○従業者評価実施期間	2026年1月6日		2026年1月31日
○従業者評価有効回答数	(対象者数)	7	(回答者数) 7
○事業者向け自己評価表作成日	2026年3月11日		

○ 分析結果

	事業所の強み（※）だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること	工夫していることや意識的に行っている取組等	さらに充実を図るための取組等
1	子どもが分かる日課と自分で選び決めることができる生活・あそび。とりくみ場所は部屋を変えていることや休憩場所の確保。仲間と共にいろいろなことを経験できる。	子どもの好きな感覚やあそびからグループに別れてとりくみをしている。日課の見通しを大切に、生活・とりくみの活動場所を分けている。季節のとりくみとして、泥あそびや水あそびを楽しみ、短縮授業日や長期休みは子どもが好きな買い物や外出経験（カラオケ・トランポリン・プール）を行っている。夏は2泊3日キャンプを行っている。	学校後の放課後の場として、日々、学校短縮日、長期休みと活動計画を立てる。その中で、季節・文化的なとりくみを行うことや子どもの好きなことを積み重ねていく。そのためにケース・学年会の内容を充実させる。
2	職員研修の充実と地域連携を通して、子ども理解を深めている。	年間通して、自主研修や職員研修が計画されている（自立支援協議会による研修や事業所間交流会）。また、他事業所と子どもの情報共有を行う。支援に悩むケースは担当者会議を提案し、学校・事業所・相談支援と行う。職員に研修機会を作り、進めている。	引き続き、事業所交流を通して、子どもの環境、生活、あそびを共有し、ACTにも生かしていく。必要な子どもの担当者会議は迅速に提案し行う。研修は計画されていても職員参加につながらないため、その職員が学びたいことからの研修計画や学習会を検討する。
3	要支援家庭の受入れと強度行動障害の子どもを受け入れをしている。	家庭の状況を家庭訪問や電話等で知り、関係作りを進めながら、必要な関係機関（学校・相談支援員・他事業所）と情報共有しながら、子ども理解を深め、家族支援を進める。また、関わりで悩む子どもは担当者会議を開催し、子ども理解を深めながら、日々の関わりにかかしていることや事業所間で関わりを検討していく。	継続的に連携をとり、一步一步支援を進める。また、必要に応じて担当者会議を継続的にを行い、事業所間で子ども理解を深め連携していく。

	事業所の弱み（※）だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること	事業所として考えている課題の要因等	改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等
1	中高生と強度行動障害児への子ども理解と関わり方。	子どもの成長と共に自分の要求や感覚が強くなり、“動かない”“突発的に動く”“物を投げる”“スタッフ・友だちを傷つける”等の姿。幼少期は大人のことばと関わりで、切り替えることができていたが、学齢期になると、余計に崩れることが多い。また、今年度はそれに伴うヒヤリや事故が数件あった。	子どもの不安感を知り、学習、研修、記録作成、ケース検討を通して、スタッフ間で一貫性と継続性を持ち関われる支援。また、強度行動障害児の関わりが誰でもできるよう、学習会・研修を行うことや第三者に入ってもらい、ケース検討を行う。事故・ヒヤリを整理し、職員間で子どもの姿を共有するためのマニュアル作りと情報共有を進める。
2	家族と共に行事を進める。また、家族と共に子ども理解を進める。	家族海水浴やバザーで出店を行っているが、家族の参加者が少ないことや協力が難しい。また、子どもの身体の成長と共に親が思春期の姿に悩むことや親自身が子どもへの関わりが難しくなっている。	家族行事は家族が参加しやすい条件を整える。また、高学年や希望する親を中心に両親懇談を行い、思春期や子どもへの関わり方、必要なサービスを共に考える機会を作る。
3	職員体制によって、その日の子どもの過ごし方が変わることや日々の体制調整が困難。	子どもの姿から生活・とりくみを別けているため、組織的な動きが必要。また、職員の勤務時間により、ケース時間確保が足りない。子どもによっては男性スタッフの関わりが必要。運転手の確保が難しい。	職員の安定的な確保と子ども理解のための打ち合わせ・会議・研修が課題になる。また、質の高い障害児支援を実現のための、市・国の制度設計が根本的課題のため、それに対しての要望を行う。